

Robert Burnsの模倣の諸相

— Ballad、Fergusson、Barbourからの模倣とその意味を考える —

中 島 久 代



スコットランド詩人Robert Burns (1759-96) は、死後200年以上を経た現在でも評価が難しい詩人である。バーンズの従来の評価を端的に表す言葉は「天賦の才の農民詩人」であろう。¹ スコッツ語で書かれているという難しさはあるが、音読の調子の良さや、蚤、ネズミ、野菊、犬、ジーンやメアリなどのありふれた女性の名前が題材となった作品への親しみやすさによって、バーンズのこの評価は現在でも根強い。しかし他方で、バーンズは「MacDiarmid、Scottと並んで議論の多い詩人」であり、² 「一見素朴に見えながら実は複雑な詩人」である。³ 複雑な詩人という評価は、バーンズ

の作品をスコットランド詩史というコンテクストに置いて読んだ時に納得される。バーンズはスコットランド文学の様々な先人たちのスタイルや表現をふんだんに模倣し、その模倣と逸脱がバーンズ自身のアイデンティティを形成しているからである。このことを示すために、Ballad、Robert Fergusson (1750-74)、John Barbour (c. 1320-95)からバーンズが行った模倣とその意味を検証する。

1 バーンズのバラッド詩

バーンズが生きた18世紀後半は、バラッド蒐集熱が高まった時代と一致している。以下は18世紀に刊行されたバラッドを含む代表的な編纂集である。

- (1) Watson, James, ed. *Choice Collection of Comic and Serious Scots Poems both Ancient and Modern*. 3 vols. 1706-11.
- (2) Ramsay, Allan, ed. *The Evergreen*. 2 vols. 1724.
- (3) Ramsay, Allan, ed. *The Tea-Table Miscellany*. 4 vols. 1724-37.

¹ Gerard Carruthers and Christopher Whyte, 'Enlightenment and Vernacular', *Scottish Literature in English and Scots*, ed. Douglas Gifford, Sarah Dunnigan and Alan MacGillivray (Edinburgh UP, 2002) 112.

² Douglas Gifford and Alan MacGillivray, 'Robert Burns', *Scottish Literature in English and Scots* 146.

³ Alan Bold, *A Burns Companion* (New York: Palgrave, 1991) xi.

- (4) Percy, Thomas, ed. *Reliques of Ancient English Poetry*. 1765.
- (5) Herd, David, ed. *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, Etc.* 2 vols. 1776.
- (6) Johnson, James, ed. *The Scots Musical Museum*. 6 vols. 1787-1803.

バラッド蒐集熱の高まりの火付け役となったのは、Thomas Percy (1729-1811) が編纂した *Reliques of Ancient English Poetry* (1765) であり、バラッドの匿名性が生み出す物語精神と技法がロマン派詩人たちに多大な影響を与えて、バラッド・リバイバルが生み出された。同時に、この時代のスコットランドは、1707年1月28日、アン女王によってイングランドとスコットランドの議会合同法が公布されて以降、スコッツ語で話し英語で書くという言語の分裂にさらされており、スコットランドの文人たちは、祖国の伝統文学と民衆の伝統文化を活性化させることで失われたアイデンティティを復活させようと、スコットランドの詩やバラッドの編纂集を次々に刊行した。David Herd (1732-1810) 編纂の *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, Etc.* の第1巻は1769年に、2巻同時には1776年に刊行された。James Johnson (c.1753-1811) 編纂の *The Scots Musical Museum* 6巻は1787年から1803年にかけて刊行され、バーズは第2巻から第5巻まで寄稿者兼編者として関わった。これらのバーズの存命中の編纂集に加えて、ハード以前の、スコッツ語詩のリバイバルに道を開いたいくつかの編纂集もバーズとバラッドの関係を形成する要因とみなすことができる。それらは、James Watson (d. 1722) によって1706年から1711年にかけて、スコッツ語による詩、フォークソング、バラッドなどを集めて刊行されたスコットランド初の編纂集 *Choice Collection of Comic and Serious Scots Poems both Ancient and Modern* 3巻や、1600年以前のスコットランド詩を収録して1724年に出された Allan Ramsay (c. 1686-1758) による *The Evergreen* 2巻、および、1724年から37年にかけて刊行された *The Tea-Table Miscellany* 4巻などである。

このような時代状況に加えて、バーズ自身が伝承バラッドをうたい聞くとする環境の中に育ったことは、バーズがバラッドと関わる決定的な要因である。家庭で母親と使用人から聞いた様々の伝承や物語によって、郷土に伝わる民衆の物語詩にバーズは目覚めたという。⁴ バーズがバラッドの模倣詩を創作する基盤は十分に整っていた。

バーズとバラッドについては、たいへん有用な研究ノートがある。Franklyn Bliss Snyder, 'Notes on Burns and the Popular Ballads', *The Journal of English and Germanic Philology*, vol. 17 (1918) 2: 281-88 である。バーズがバラッドをどのように模倣したのかについて、スナイダーはバーズの作品をAからCの3つのカテゴリーに分類

⁴ James Alison, 'The Ballads', *Scottish Literature in English and Scots* 75.

している。⁵

分類	バーンズ作品（作品名はSnyderのまま）	元歌（作品名はSnyderのまま）
A	Lord Gregory	The Lass of Roch Royal (76)
	Kellyburn Braes	The Farmer's Curst Wife (278)
B	The Five Carlins	tune: Chevy Chase (162B)
	John Barleycorn	stanza: Chevy Chase (162B)
	Grim Grizzel	stanza: Chevy Chase (162B)
	Elegy on Willie Nicol's Mare	incremental repetitionを模倣
	The Fete Champetre	第1スタンザに模倣の痕跡
C	The Duchess of Gordon's Reel Dancing	Tam Lin (39A)
	Highland Harry The Last Braw Bridal	“When bells were rung and mass was sung, / And a' folk bound to bed.”のような常套表現の模倣
	John Anderson, My Jo	Lady Elspat (247)
	The Ranting Dog	Fair Annie (62E)
	My Hoggie	The Wife of Usher's Well (79A)
	The Bonie Lad that's Far Awa	The Elfin Knight (2A)
	Lady Mary Ann	Sir Hugh (155A) The Bonnie House o Airlie (199B)
	Charlie He's My Darling	Glasgerion (67A)
	The Lass that Made the Bed	King Henry (32)
	It Was A' for Our Rightfu' King	Young Hunting (68A)
	Young Jessie	Rare Willie Drowned in Yarrow (215)
	O, Let Me in This Ae Night	Erlinton (8A)

バーンズが伝承バラッドを忠実に模倣して語り直している分類Aには、‘Lord Gregory’と‘Kellyburn Braes’が挙げられている。「ロード・グレゴリー」は‘The lass of Roch Royal’ (Child 76)の、「ケリバーンの丘の農夫」は‘The Farmer's Curst Wife’ (Child 278)からの模倣である。リフレインや常套表現などのバラッドの様式が模倣されている分類Bでは、‘The Five Carlins’、‘John Barleycorn’、‘Grim Grizzel’などの作品が挙げられている。これらについては、どのような伝承作品からどの程度の模倣がなされているかの詳細は述べられておらず、模倣のポイントのみ解説されている。バラッドの特徴的な表現が1箇所でも使われている作品は分類Cである。例えば‘The Duchess of Gordon's Reel Dancing’には“*She kiltit up her kirtle weel.*”という表現があり、これは伝承バラッド‘Tam Lin’ (Child 39A)にある“*Janet has kilted her green kirtle*”からの模倣である。スナイダーがAからCまで分類しているバーンズの作品は合計20作品を数え、バーンズには伝承バラッドの広い知識があったことがわかるが、それはスナイダーが言及したバラッドに限られるのではない。1790年のMrs. Dunlop（生没年未詳）という人物へ宛て

⁵ スナイダーの表および以降の伝承バラッド作品名後のカッコ内のアルファベットと数字は、F. J. Child, ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols (Dover, 1965: rpt. 2003)（以下、ESPBと略す）を出典としたチャイルド番号と版を示す。

た書簡に、素朴でありながら心に訴える古いスコットランドのバラッドとして ‘Mary Hamilton’ (Child 173)の中のひとつのスタンザをバーンズは引用している。⁶ 1793年のGeorge Thomson (1757-1821)へ宛てた書簡では、‘Hardyknute’などの他の詩人が書いたバラッド詩に加えて‘Gil Moris’ (Child 83)と‘Barbara Allen’ (Child 84)を挙げて、これらと叙情詩との違い述べている。⁷ 十分馴染んで、表現の貯蔵庫にも等しかった伝承バラッドから様々な典型的な表現や常套句を、ソングとバラッド詩の創作のためにバーンズが自在に取り入れていることは明らかである。

厳密に言えば、バーンズのバラッド詩にはバラッドの無意識的な模倣とバーンズの意図が明確に存在する模倣の2種類があると思われる。分類Bの‘John Barleycorn, A Ballad’ (1783)は無意識的な模倣といってよい。ジョン・バーレイコーンとは、ビールやウイスキーの醸造に使う大麦の麦芽、モルトを擬人化した呼び名であり、ジョン・バーレイコーンが祖国の英雄に擬せられて、権力者から命を奪われ土に埋められても春になって復活し、収穫されて再び命を奪われて、今度はウイスキーの原料となってしまうが、大胆さと冒険心と喜びはウイスキーを飲んだ人間に伝わるのだという、不滅のヒーロー伝説が仕立てられている。感情表現を抜いた徹底した物語である点と、基本的には a b c b の韻を踏むバラッド・スタンザで創作されている点において、典型的なバラッドの枠組みが構築されているが、これらに加えて、バーンズが伝承バラッドの常套表現を巧みに利用している点が興味深い。以下にバーンズの作品と伝承バラッドを並べて、バーンズの模倣を示す。

‘John Barleycorn, A Ballad’

1

There were three kings into the east,
Three kings both great and high;
And they hae sworn a solemn oath
John Barleycorn should die.

15

Then let us toast John Barleycorn,
Each man a glass in hand;
And may his great posterity
Ne'er fail in old Scotland!

[From *The Poetical Works of Robert Burns*, vol. 1, with Memoir, Critical Dissertation, and Explanatory Notes by the Rev. George Gilfillan (Edinburgh: James Nichol, 1856)]

‘The Cruel Brother’ (11G)

There was three ladys in a ha,
Fine flowers i the valley
There came three lords amang them a',
Wi the red, green, and the yellow (st. 1)
[From *ESPB*]

‘Jock o the Side’ (187B)

They hae gard fill up ae punch-bowl,
And after it they maun hae anither,
And thus the night they a' hae spent,
Just as they had been brither and brither.
(st. 37)
[From *ESPB*]

⁶ De Lancey Ferguson ed., *Selected Letters of Robert Burns* (Oxford UP, 1953) 220.

⁷ Franklyn Bliss Snyder, ‘Notes on Burns and the Popular Ballads’, *JEGP* 282.

「東方に三人の王様がいました」というバーンズの出だしは、例えば、伝承バラッド‘The Cruel Brother’ (Child 11)の出だしのスタンザ「娘が三人広間にいました／谷間にきれいな花が咲き／男が三人やってきました／赤と緑と黄の服を着て」という、バラッド特有の様式化された出だしと、悲劇を予感させるミスティック・ナンバーの3がきっちり模倣されている。⁸ また、最終15スタンザの「それではジョン・バーレイコーンのために乾杯をしよう。／ひとりひとりが手にグラスを持って、願わくば彼の偉大な子孫が／古きスコットランドに絶えませんようにと。」という結びの部分は、例えばボーダー・バラッド‘Jock o the Side’ (Child 187B)で、仲間の救出に無事成功したアウトローたちが乾杯で互いをねぎらい祝福する最終場面、「パンチボールになみなみ注いで／何杯も何杯も飲みました／兄弟の盃を交わすうち／夜は更けてゆきました」の場面と重ねられる。バラッドの枠組みに複数の伝承バラッドの常套表現を自在に持ち込んで、素朴で愉快的な大麦の物語が創作されている。加えて、この作品にはバーンズのテーマがある。自ら作品に付けたコメントで“*This is partly composed on the plan of an old song known by the same name.*”とバーンズは述べており、植物の霊魂についての広く知られた神話をバーンズ流に語る事がこの作品の創作の目的だったことがわかる。⁹ 神話を聞きやすくうたいやすいバラッドのスタイルで再構築し、人々が馴染んだ常套表現を利用して語り直したのである。このような模倣から読み取れることは、伝承バラッドをうたい聞く人々が持っていた文化を伝承する行為への共感と、その行為に本質的に内在する遊戯的な精神をバーンズが共有していたということ、つまり、バーンズがバラッド的素養を持っていたということである。¹⁰

意図的な模倣の例として、スナイダーの分類Aから‘The Carle of Kellyburn Braes’ (1794)を読んでみよう。この作品は伝承バラッド‘The Farmer’s Curst Wife’ (「農夫の悪妻」、Child 278) をかなり忠実に模倣したものである。

⁸ バーンズ作品の翻訳は、ロバート・バーンズ研究会編訳『ロバート・バーンズ詩集』（国文社、2002年）による。また、伝承バラッドの翻訳は、バラッド研究会編訳、中島久代・薮下卓郎・山中光義監修『全訳チャイルド・バラッド』全3巻（音羽書房鶴見書店、2005-06年）による。

⁹ James Kinsley, ed., *Burns Poems and Songs* (Oxford UP, 1969; rpt. 1988) 122.

¹⁰ この作品と、パロディとしてのGeorge MacKay Brown (1921-96) の“The Ballad of John Barleycorn, the Ploughman, and the Furrow” (1969) についての興味をそそる論考がある。山中光義「“John Barleycorn”をめぐる二つのバラッド」（日本バラッド協会HP、研究ノート、2010年6月<<http://www.j-ballad.com/note/156-robert-burns-george-mackay-brown.html>>）参照。

‘The Carle of Kellyburn Braes’

1

There lived a carle on Kellyburn braes,
(Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme,)
And he had a wife was the plague o’ his days;
(Ann the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)

.....

11

The devil he swore by the edge o’ his knife,
(Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme,)
He pitied the man that was tied to a wife;
(Ann the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)

12

The devil he swore by the kirk and the bell,
(Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme,)
He was not in wedlock, thank heaven, but in hell;
(And the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)

.....

14

‘I hae been a devil the feck o’ my life;
(Hey, and the rue grows bonnie wi’ thyme,)
But ne’er was in hell, till I met wi’ a wife;
(And the thyme it is wither’d, and rue is in prime.)
[From *Poetical Works*, vol. 1]

‘The Farmer’s Curst Wife’ (278A)

There was an old farmer in Sussex did dwell,
(*Chorus of whistlers*)
There was an old farmer in Sussex did dwell,
And he had a bad wife, as many knew well.
(*Chorus of whistlers*) (st. 1)

.....

‘I have been a tormentor the whole of my life,
But I neer was tormented so as with your wife.’ (st. 11)
[From *ESPB*]

‘The Elfin Knight’ (2G)

‘Can you make me a cambrick shirt,
Parsley, sage, rosemary and thyme
Without any seam or needle work?
And you shall be a true lover of mine (st. 1)
[From *ESPB*]

伝承バラッド「農夫の悪妻」では、農夫から悪妻を譲り受けた悪魔が苦勞して背中に悪妻

を担いで家に戻ると、悪妻は悪魔の子供たちを蹴り、頭を殴り、悪魔を壁にぶちあて暴力三昧にふるまう。悪魔は農夫に悪妻を返しに行き、最終行では「今までさんざ 人間(ひと)を苦しめる役は演じたが／おまえさんの女房から苦しめられるほどの役はなかった」と弱音を漏らすという滑稽な物語である。バーンズの作品でも、ケリバーンの農夫から悪妻を譲り受けた悪魔は、貧乏な行商人よろしく悪妻を家へと運んでいったが、悪妻は気が狂った熊のように50人の悪魔の警護隊をひとり残らず殴ってしまう。悪魔はこの悪妻に縛られていたケリバーンの農夫を哀れに思い、しかし悪魔自身の結婚生活も地獄の生活だと気づき、農夫に悪妻を返しに行く。最終14スタンザの台詞は「おれは生涯悪魔だったが／ヘンルーダとタイムは青く茂っている／この悪妻に会って初めて 地獄を見た／タイムは枯れても ヘンルーダは咲いている」（拙訳）というものである。悪魔が人間の悪妻に降参するという滑稽なストーリーはまったく同じだが、第11と第12スタンザに見られるように、バーンズの悪魔はナイフの刃にかけてケリバーンの農夫に同情し、教会と鐘にかけて農夫は地獄の生活をしていたのだと悟り、悪魔の軟弱さと卑小さが一段と強調されている。さらに、この作品では各スタンザの2行目と4行目に置かれたリフレインが注目される。「ヘンルーダとタイムは青く茂っている」と「タイムは枯れても ヘンルーダは咲いている」というリフレインは、このストーリー自体にはまったく関係しないもののように見える。意味をあえて読み込むとすれば、伝承バラッドのリフレインのような、人間の悲哀を自然の中に包み込んで癒す役割を果たしているのかもしれない。実際、ストーリーに直接関係のない植物名が並べられるリフレインは伝承バラッドに特有のものである。例えば‘The Elfin Knight’ (Child 2G)のリフレインは「パセリ セージ ローズマリーにタイム」という植物名の羅列から成っており、妖精の男と人間の女のかなわぬ恋の痛みを癒す効果をもたらしている。しかし、このバーンズのリフレインにスコットランド格言“Rue and thyme grow both in one garden”（ヘンルーダとジャコウソウは両者とも同一の畑に生える）を並べると、このリフレインが単なる伝承の模倣ではなく、バーンズの意図的な技巧であることが判明する。¹¹ *The Oxford Dictionary of English Proverbs*は、この格言の意味を“A persuasion to repent and give over an attempt before it be too late, alluding to the sound of the two herbs here named.”と解説している。“Rue”はヘンルーダと後悔の意味を持ち、“thyme”はその音から“time”をも連想することから、この格言は「後悔先にたたず」に相当する。バーンズは伝承バラッドのリフレインの模倣に見せかけながら、「後悔先にたたず」という格言を暗示するリフレインを創作して、悪魔とケリバーンの丘の農夫の哀れさに物語の最初から最後まで教訓を垂れているのである。教訓性は物語に徹する伝承バラッドにはないものであり、このリフレインによって物語全体は農夫の悲しみを強調するセンチメンタルなものに変質されている。とすれば、悪魔がナイフ

¹¹ 藪下卓郎・山中光義編、*Traditional and Literary Ballads*（大阪教育図書、昭和55年）168。

の刃にかけてケリバーンの農夫に同情したり、教会と鐘にかけて地獄の生活を悟ったりする下りも、単なる誇張表現ではなくて、悪魔の、ひいてはバーンズの宗教に対する軟弱でセンチメンタルな態度を暗示するものではないだろうか。この作品のみからバーンズの宗教観を掘り下げることができないが、Edwin Muirが*Scottish Journey* (1935)の中でしきりに繰り返す、John Knox (c. 1514-72)による宗教改革以降のスコットランドにおける信仰の質の変化とバーンズ批判は、このようなバーンズの模倣における物語の変質をも指すのではないか。ミュアは次のように語っている。

“That genius [the genius of the border People] was partly heroic and partly poetical, and its most essential expression is the ballads, which form the greatest body of Catholic poetry in Scottish literature, greater even than that of Henryson and Dunbar. These ballads continued to be sung and written long after the Reformation without any fundamental change of spirit, so that it is easy now to mistake an eighteenth-century ballad for a sixteenth-century one. In calling the ballads Catholic I am using that term very loosely, and mean by it nothing more than that the ballads possess a quality which the rest of Scottish poetry after the Reformation lacks. Burns is a very Protestant poet. Even in his remoulding of old folk songs he never goes back in sentiment past the Reformation. He certainly had no affection for the God of Knox, yet he himself had no other, except on occasion an eighteenth-century abstraction. His ribaldry, blasphemy, libertinism and sentimentality are all Protestant, and quite narrowly so.”
[Edwin Muir, *Scottish Journey* (Edinburgh: Mainstream, 1935) 45-46]

ミュアはバラッドを、中世スコットランド詩人ヘンリソンやダンバーよりもさらに偉大なスコットランド文学の、カトリック伝統詩の最大の集積であると述べている。その理由は、バラッドは宗教改革後も長く改革以前の精神を変えないことなくうたわれてきたからである。これに対して、バーンズの模倣が表現しているのはプロテスタント的な精神であり、彼の作品に見える卑猥、冒瀆、放蕩、感傷性はすべてプロテスタント的であると述べる。バーンズがプロテスタント的であるかどうかを言うことは私には難しい。しかし、伝承バラッドとの比較においてバーンズの模倣作品に生まれたセンチメンタルな傾向は否めない。

2 フェーガソンからの模倣と逸脱

バーンズのセンチメンタルな傾向を押さえた上で、ロバート・フェーガソンからの模倣詩に視野を広げたい。バーンズはスコッツ語詩人フェーガソンに傾倒したが、模倣の才に恵まれた彼はフェーガソンの‘The Farmer’s Ingle’(「農夫の炉辺」、1773)にも模倣と変奏を企てた。¹² この作品は、スコットランドのアイデンティティの危機の時代にあつて、スコットランドの真の強さが農民の持つ徳と彼らの肉体の逞しさにあることをうたっている。自然をさりげなく描写し、田舎の良さを賞賛し、ひるがえって豪華な生活をやんわりと批判し、愛国心を声高に叫ぶでもなく、道徳的な説教を垂れることもない。いつの時代

¹² フェーガソンからの模倣については次の文献に極めて詳細な分析があり、参考になる。David Daiches, *Robert Burns* (Andre Deutsch, 1950; rev. 1966) 117-23.

の読者にも、行為と精神のシンプルさこそが何よりも尊いことを伝える作品である。冒頭のエピグラフはローマ詩人ウェルギリウスの「牧歌」第5番からの引用であり、ドライデンの英訳による大意は「二つの盃をスパークリングワインで満たそう／キオス島の葡萄からできた豪華なワインで／きみに注ごう この飲み物は君のものだ／冬には暖炉の前で心暖まる酒盛りとなるだろう／夏には木陰で」（拙訳）となる。

‘The Farmer’s Ingle’

Et multo in primis hilarans convivia Baccho
Ante focum, si frigus erit, (si messis, in umbra,
Vina novum fundam calathis Ariusia nectar)
Virg. Buc.

Whan glomin’ grey out o’er the welkin keeks,
Whan Batie ca’s his owsen to the byre,
Whan Thrasher John, sair dung, his barn-door steeks,
And lusty lasses at the dighting tire:
What bangs fu’ leal the e’enings coming cauld,
And gars snaw-tapit winter freeze in vain;
Gars dowie mortals look baith blyth and bauld,
Nor fley’d wi’ a’ the poortith o’ the plain;
Begin, my Muse, and chant in hamely strain. (1-9)

[From *Weekly Magazine or Edinburgh Amusement* (Edinburgh, 1773), Ian Lancashire, ed.,
Representative Poetry Online, 25 June 2008 <<http://rpo.library.utoronto.ca/poem/808.html>>]

「農夫の炉辺」

空に灰色の闇が迫るころ
牧羊犬が牛を牛小屋へと追いたてるころ
農夫のジョンが 疲れ果てて 小屋の戸口を閉め
きれいな娘たちも 糶穀選りに疲れるころ
忠実にやって来る 夜の寒さを忘れさせ
雪混じりの冬の嵐を空しくし
素朴なものたちの貧しさからは逃げだせずとも
衰れな人間を愉快にも大胆にも見せてくれるうたを
ぼくの詩神よ いつもの調子で さあうたってくれ (拙訳、1-9)

この作品はバーンズの‘The Cotter’s Saturday Night’（「小作人の土曜の夜」、1785-86）の元歌と言われている。農作業から解放された農夫のささやかな憩いの時を題材にしていることはまったく同じだが、作品の展開はファーガソンとバーンズでは大きく異なっている。まず、エピグラフからバーンズの変質が明らかになる。引用はThomas Gray (1716-71)の‘Elegy Written in a Country Churchyard’ (1751)の第8スタンザからであり、「人のための骨折り、質素な喜び、埋もれ生きる宿命を／野心あふれる者に、あざ

笑わせてはならない。／軽蔑の笑みを浮かべて、貧者の短くて素朴な一代記を聞くようなまねを／尊大な者にさせてはならない。」という諸行無常を伝えるエピグラフである。続いて、バーンズは個人への献辞をうたう。



(‘The Cotter’s Saturday Night’ 画像)

‘The Cotter’s Saturday Night’
INSCRIBED TO ROBERET AIKEN, ESQ.

‘Let not ambition mock their useful toil,
Their homely joys, and destiny obscure;
Nor grandeur hear with a disdainful smile,
The short and simple annals of the poor.’
GRAY.

My loved, my honour’d, much respected friend!
No mercenary bard his homage pays;
With honest pride, I scorn each selfish end:
My dearest meed, a friend’s esteem and praise:
To you I sing, in simple Scottish lays,
The lowly train in life’s sequester’d scene;
The native feelings strong, the guileless ways;
What Aiken in a cottage would have been;
Ah! though his worth unknown, far happier there, I ween! (1-9)
[From *Poetical Works*, vol. 1]

わたしの愛と尊敬に値する、立派な友、エイケンよ。
あなたはさもしい詩人に敬意を払いなどはしない。
わたしは偽りのない誇りで、すべての利己的な目的をあざ笑う。
最高の褒美とは友から受ける尊敬と賞讃。
わたしはあなたにスコットランドの素朴な歌で伝えよう、
世間から離れて生きる貧しい人たちのことを、
そして彼らの生まれながらの強健な感情とその誠実な習慣を。
エイケンが百姓小屋に住むとしたら、それを彼はどう思うだろう。
ああ、彼の値打ちを知る人はないが、彼はそこがどこよりも幸せだと感ずることだろう。(1-9)

エイケンとは、バーンズの故郷エア出身の法律家、ロバート・エイケンを指す。冒頭から気付くのは、バーンズが詩の主人公とは対極にあるインテリ層の読者を意識してこの作品を書いているのではないかということである。地位も財産もある法律家が百姓小屋に住んだ方が幸せであるという発想は、献辞にしてはいささかセンチメンタルに誇張が過ぎている。また、第4スタンザ35-36行では、“Or deposite her sair-won penny-fee, / To help her parents dear, if they in hardship be.”（それとも家が困っているのなら、その足しにもと、／こつこつ稼いだ給金を大切な両親に預ける気かもしれない。）とうたうが、長女ジェニーが町へ出稼ぎに行くというのは、牧歌的な生活には似合わない。農夫が一週間の締めくくりの仕事として家族へ訓戒を垂れる第6スタンザ46-47行の“*Their master’s and their mistress’s command, / The younkners a’ are warnèd to obey;*”（仕えている主人や女主人の言いつけをかたく守り、／一生懸命自分の仕事に精を出し）という台詞や、50-52行の“*And oh! be sure to fear the Lord always! / And mind your duty, duly, morn an’ night! / Lest in temptation’s path ye gang astray,*”（それにだね。いつも神様を畏れ敬うんだ。／朝に夕に絶対お祈りは忘れちゃいけないよ。／そうでなきゃ悪い誘惑に負けてしまうからね。）という台詞は、プロテスタント的な道德臭を漂わせている。さらに、ジェニーを訪ねて来た若者が純真素朴な人柄だと描写しながら、第10スタンザ83行の“*A wretch! a villain! lost to love and truth!*”（愛と真実から見放されたならず者）という矛盾した怒りや、90行目の“*the ruin’d maid*”（墮ちた少女）という激昂した台詞は、娘が必ずや悪い男から誘惑されて身を滅ぼすと言わんばかりであり、行為と精神のシンプルさを讃えたファーガソンの元歌からは大きく逸脱してゆく。このような逸脱の積み重ねは、バーンズがセンチメンタルな方向に物語を進めていることを読者に印象付ける。そして、最終スタンザは、農夫の憩いのテーマからは完全に逸れて、激烈な愛国心の表現で結ばれる。

O Thou! who pour’d the patriotic tide
That streamed through Wallace’s undaunted heart;
Who dared to nobly stem tyrannic pride,
Or nobly die, the second glorious part,
(The patriot’s God peculiarly thou art,
His friend, inspirer, guardian, and reward!)
O never, never Scotia’s realm desert;
But still the patriot, and the patriot bard,
In bright succession raise, her ornament and guard! (181-89)

ああ、あなた様、ウォレスの不運にして偉大なる心に流れ、
愛国の血潮を注がれし神よ。

ウォレスは極悪非道の傲慢に敢えて気高く抵抗しようとした。

さもなければ潔く死を、彼はすなわち第二の栄光の道を選ぶ心構えだった。

(あなた様は特に愛国者の神様であらせられ、

さらに彼の友であり、鼓吹者であり、守護者であり、報いであらせられる。)

ああ、決して、決してスコシアの地をお見捨てにならないでください。

そしてますます愛国者と愛国詩人を、
スコシアの誉れとし、番人として、次々とおはぐみください。

結論としての「愛国詩人を次々と育てたまえ」という祈りは、大きく逸脱したとはいえ、バーンズが元歌としたファーガソンを忘れてはいないということのアピールするものであろうか。バーンズのこの作品はファーガソンの「農夫の炉辺」を元歌としながら、その逸脱によってバーンズの個性を浮き彫りにしている。この作品の主人公は農夫であるが、時には説教師となり、時には愛国詩人ともなる。主人公のペルソナは次々に入れ替わり、結末に向かうにつれて語りの調子は高められ、田舎の農夫は愛国心を叫ぶ詩人に変質して作品は終わる。このような作品の展開から見えてくるのは、都市の読者層をターゲットにして、農夫の生活の素朴さ、篤い信仰心、激しい愛国心をアピールするというセンチメンタリズムに訴えた、バーンズのしたたかな対読者意識である。

このように見ると、この作品の詩型の整い方も気になるところである。ファーガソンの作品は9行スタンザでababcdeddと韻を踏んでいるのに対し、バーンズの作品はababbcbccと韻を踏む“Spenserian stanza”で構成されている。スコットランド人としてのアイデンティティを訴える声高な叫びを、英国詩人の型の中で行うというスタイルは、バーンズの見せたほころびと言うよりは、バーンズの詩人としてのしたたかさを示しているのではないだろうか。

3 バーバーからの詩形の模倣

バーンズの詩型の巧みさをより明らかにするための、スコットランド中世詩人ジョン・バーバーの‘The Bruce’の詩型とバーンズの‘Tam o’ Shanter’ (1790) を比較してみよう。

「ブルース」は1375年頃に書かれた、スコットランド文学史上初のスコッツ語による本格的な長編詩であり、ロバート・ブルースことロバート一世が1314年のバノックバーンの戦いでイングランドのエドワード二世に勝利し、祖国の独立を勝ち取るというのが作品のストーリーである。“A! fredome is a noble thing” (ああ！ 自由こそ尊きもの) (Book I: 225)という著名な一行が伝えるように、この作品は、スコットランドが誇る自由の精神の啓蒙に大きく貢献した。雄々しさと躍動感に溢れたこの作品のストーリー展開をより一層効果的にしている秘訣は、バーバーの用いた四歩格の二行連句の詩型にある。英雄詩体二行連句に似てさらに軽快な四歩格の二行連句の詩型は、作品全体にスピード感を与えている。出だし近くの原文を読んでみよう。

‘The Bruce, Book I: a Preface’

Quhen Alexander the king wes deid

「ブルース 第1巻 序」

スコットランドの導き手

That Scotland haid to steyr and leid,
The land sex yer and mayr perfay
Lay desolat aftyr hys day
Till that the barnage at the last
Assemblyt thaim and fayndyt fast
To cheys a king thar land to ster
That off auncestry cummyn wer
Off kingis that aucht that reawte
And mayst had rycht thair king to be.

(My emphasis, 37-46)

[From Roderick Watson, ed., *The Poetry of Scotland: Gaelic, Scots and English 1380-1980* (Edinburgh UP, 1995)]

アレグザンダー王の崩御のとき
誓って 王の御代から六年以上も
祖国は混乱のありさま
貴族たちは ようやく
一同に会して
祖国を導く王を選びにかかった
先祖が
王家の血筋を引いて
王たるにもっとも相応しい王を (拙訳)

祖国のヒーローの活写に使われたこの詩型を、バーンズは、シャンタ村の一庶民タムが酒に酔ってパブから帰宅する時に経験した超自然現象をおもしろおかしくうたった詩「シャンタのタム」に利用している。昔馴染みの靴屋のジョニーとしたたか飲んで、風と雨が吹き荒れる真夜中に、タムは愛馬メグに乗って女房ジーンのもとへと帰ってゆくが、アロウェイ教会の廃虚近くまで来ると、奇怪な光景に出くわした。魔法使いや魔女たちが踊っているのだ。彼らが手に持った灯火で、タムはさらに奇怪な幻想を見る。その詩型に注目したい。

‘Tam o’ Shanter: A Tale’

「シャンタのタム」

By which [a light] heroic Tam was able
To note upon the haly table,
A murderer’s banes in gibbet airns;
Twa span-lang, wee unchristen’d bairns;
A thief, new-cutted frae a rape,
Wi’ his last gasp his gab did gape;
(My emphasis, 129-34)

その明かりで、勇者タムが
目にしたのは、聖餐台の上の、
首吊り鎖のついた、殺人犯の骨と、
二つの、九インチほどの、小さな洗礼前の赤ん坊だ。
絞首縄から今しがた切って降ろされたばかりの泥棒は、
最期の息を吸ったまま、口をあぐり開けていた。

[From *Poetical Works*, vol.1]

タムが見る幻想は薄気味悪い死体ばかりではない。魔女たちは激しい踊りに汗をかき、服を脱ぎ捨て下着一枚で踊り狂っているが、骨と皮ばかりの老婆たちにまじって若い魔女が登場すると、タムは有頂天になる。

Till first ae caper, syne anither,
Tam tint his reason a’ thegither,
And roars out, ‘Weel done, Cutty-sark!’
And in an instant all was dark:

(My emphasis, 187-90)

跳んではね、はねて跳ぶ踊りが進むにつれ、
タムはすっかり無我夢中、思わず大声あげた、
「うまいぞ、下着のねえちゃん！」
とたんに、真っ暗闇。



(“Tam o’ Shanter: A Tale” 画像)

忽然と現われたゴシックの世界、ストリップショーまがいの目くるめくような美女の踊り。酩酊したタムの頭がいつそう混乱するあり様が四歩格の二行連句の詩型によって読者に臨場感を持って伝えられる。バーバーの作品は雄々しさと躍動感をこの詩型で盛り上げているが、バーズはバーバーの詩型を利用することによって、およそブルースと対照的な、タムのだらしなさや庶民性といったものを一層際立たせせることに成功している。

バラッド、ファーガソン、バーバーという3つのスコットランド詩の先人からの模倣という視点でバーズの作品をたどってみると、作品のストーリーはセンチメンタルな傾向に傾き、他方、詩型はオーソドックスな傾向を持っていることがわかる。天才農民詩人と言うより、スコットランド文学の先人のさまざまなジャンルとスタイルを模倣し利用し、そこに彼自身のオリジナリティを付加するという優れた変容力を持つ詩人であるという評価が、バーズには相応しい。

[本論は、『九州共立大学経済学部紀要』116 (2009) 掲載の初出論文に加筆訂正を加えたものである。]